

赤かび病防除における追加防除要否判定 に必要なかび毒汚染リスク評価手法

【成果の特徴】

子実のかび毒汚染を暫定基準値以下に抑制するにあたり，追加防除の要否を予測することは重要です．そこで，追加防除の要否を判定するための葯の赤かび病菌感染率から子実の DON 濃度を予測する手法および湿度データからかび毒蓄積リスクの評価手法を開発しました．

【成果の内容】

開花期の葯における赤かび病菌感染率と子実の DON 濃度間に高い正の相関がありました（図 1）．葯の感染率を調べることで子実の DON 汚染程度が予測でき，追加防除の要否を判定できる可能性が示されました．

赤かび病感染後，湿度 82%以上の期間が 150 時間を超えるとかび毒が蓄積し始めました（図 2）．開花期から湿度 82%以上の期間を積算することで，かび毒蓄積リスクが評価でき，追加防除の要否を判定できる可能性が示されました．

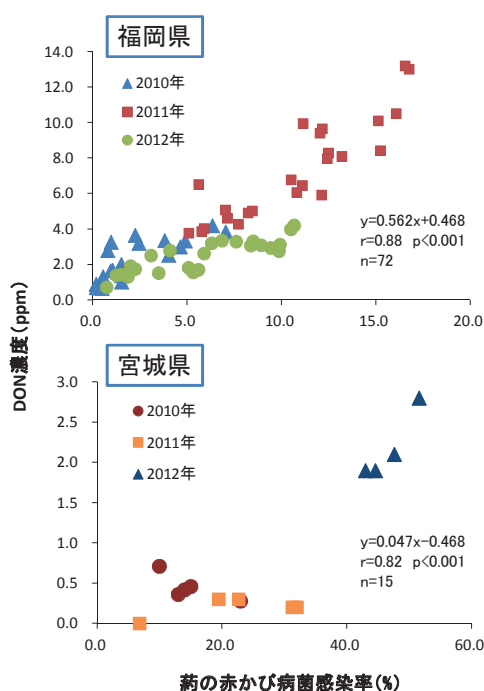


図 1 開花期の葯の赤かび病菌感染率と子実の DON 濃度との関係

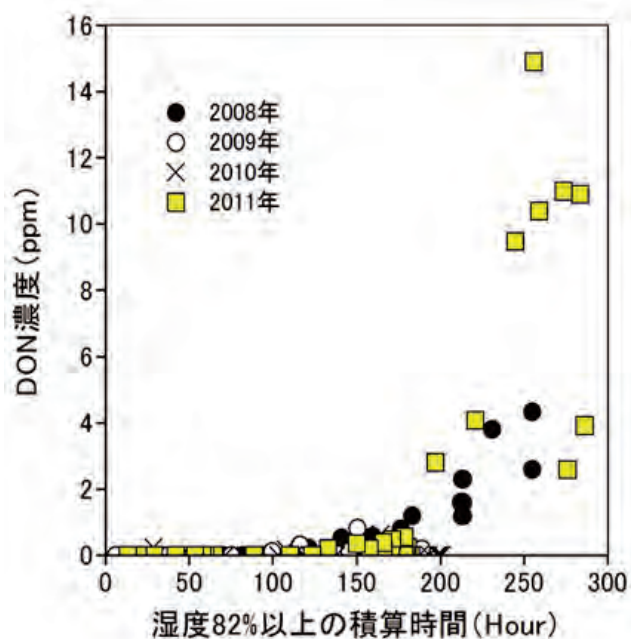


図 2 赤かび病感染後の湿度と子実の DON 濃度との関係

【研究担当者氏名（所属機関名）】

石井貴明（福岡農総試），宮野法近（宮城古川農試），黒瀬義孝（近農研）